万博と映画『家族』

昔から映画が好きだ。最近はあまり行くことができないが、映画館でじっくりと鑑賞すると、つい感傷的になってしまう。映画監督のなかでは、何といっても山田洋次監督の作品をよく観てきた。大学3年の頃、信州松本の映画館で「寅さん」シリーズを観て、ほかの観客とともに笑い、感傷的になったことを思い出す。進路に悩んでいた4年になって観た『家族』も忘れられない。映画を観てから、高度成長の光と影、地域経済について関心をもつようになった。

社会学者の吉見俊哉さんの『万博幻想』は、愛知万博「騒動」の頃、興味深く読んだことがある。再び、大阪「カジノ万博」に関わるようになり、書棚から本書をとりだして再読した。すると冒頭に、映画『家族』が紹介されていた。まさに1970年大阪万博と家族の対照的な風景である。吉見さんらしく、じつにリアルに、この映画を「案内」している。吉見さんの「案内」により、戦後の万博史の一コマを振り返りたい。

寅さんシリーズで知られる山田洋次が 1970 年に監督した映画に、『家族』という傑作がある。主人公の夫・風見精一（井川比佐志）と妻・民子（倍賞千恵子）は、長崎の沖合に浮かぶ炭鉱の島・伊王島で年老いた父・源蔵（笠智衆）や幼い二人の子どもたちと閉山直前の炭鉱で下請け労働をして貧しく暮らしていた。そんな生活への絶望から、夫は北海道の開拓村への移住を決意する。家族は島の人々に見送られながら連絡船で長崎に渡り、そこから一路、鉄道で東へと向かう。

車窓から見えるのは、高度経済成長をひた走る工業立国の姿である。九州の農村風景の先には八幡製鉄所の巨大な工場群と煙突が現れ、瀬戸内海沿いに発達しつつあったコンビナートがつづく。そうしたコンビナートの職員となって福山で働く弟一家が住んでいたのは 2DK の社宅で、弟は小型乗用車に乗って通勤していた。精一らは、もともと弟に父の源蔵を預けるつもりだったが、狭い社宅では預けようもなく、結局、父も連れて北海道まで渡っていくことになる。

やがて、一家が山陽本線を降りるとそこは大阪。梅田の地下街であろう。目の前の通路を通り過ぎる凄まじい人の濁流に茫然として消耗し果てた一家が駅ビルの食堂で休むシーンがある。新幹線の時刻までは3時間ほどの余裕があり、妻は万博見物を提案する。「そうか、たしか大阪でハクランカイやってたにぃ」と頷く義父に、妻は「ハクランカイじゃなか。バンパクやろが」と応じる。「バンパク」は「ハクランカイ」ではな

い、もっと違う何かだったのだ。

一家は千里の万博会場の入口までやって来るが、すでに新幹線の時刻が迫っていた。結局、会場での凄まじいばかりの群集の流れに気圧されて、入口付近から会場のなかを覗き込むだけで新大阪駅へと向かう。しかしそれでも、太陽の塔や動く歩道、モノレールにお祭り広場付近の雑踏といった光景が、この一家の前にも展開する。

さらに「バンパク」は、大阪の街のいたるところに溢れれてもいた。お子様ランチには万博のシンボルマークをあしらった旗が載せられ、街には万博ソングが流れていた。「バンパク」は、とてつもなく華やかな文明の祭典として受けとめられ、その得体の知れぬ「とてつもなさ」に引き込まれ、膨大な数の人々が洪水のように押し寄せていた。

貧しく、哀れな命の群れは、この濁流に巻き込まれて疲弊する。民子が抱いていたまだ赤ん坊の子・早苗は、一家がこの万博見物から引き揚げて新幹線に乗ったあたりから様子がおかしくなり、東京に着くと容態が急変して高熱でひきつけを起こす。一家は救急病院を捜しまわるがどこもつれなく、結局、早苗は十分な治療も受けられずに儚い命となった。

一家の困難な旅はこの後もつづくが、本論の観点からするならば、話はここまでで十分であろう。大阪万博の華やかさと日常風景への浸透、会場での圧倒的な人の濁流、その華やいだ幻想に向けられる殺気立った熱気のなかで踏み潰されていった貧しき人生、そして喪われる幼い命。1970 年という戦後日本史のなかの重要な転換点、そこに一瞬、佇んだ日本列島と日本人の表情を、この山田洋次監督の『家族』くらいに見事に切開してみせた作品をわたしは知らない。

そこでは、戦後日本にとって「高度成長」とは何であったのかが列島を縦断するロケを通じて凝視されている。一方には九州の炭鉱町と北海道の開拓村をつなぐ人生の軌跡があり、他方には国土に再配置されたコンビナートと大阪万博の風景がある。大阪万博が寿いでみせた成長の夢は、膨大な数の大衆の欲望を呑み込みながら、幾多の貧しき人生を拒絶し、脆き命を押し潰し、山野をコンクリートで固められた都市に変えてきた。

やがてこのプロセスの高らかな宣言である万博開会式の映像が、戦後日本の「成功」を象徴する風景としてメディアのなかで再演しつづけていくであろう。しかし、そうした映像が隠すのは、万博会場を入口付近で覗き込むだけで引き返さなければならなかったこの映画の家族のような者たちの人生であり、そうした人生の側から眺めた列島の風景である。今、改めて戦後日本の万博史を問いなおすには、われわれのまなざしは、まさにこのような者たちから見えてくる歴史の位相に届くものでなければならない。

（2018 年 5 月 19 日）